

報告

IAU 総会 2012 北京

鈴木文二（春日部女子高等学校）

1. はじめに

三年に一度、世界中の天文学者が集まる国際天文学連合(<http://www.iau.org/>)の第28回総会が、8月20日から31日まで、中国の北京で開催された。前々回のプラハ総会は、冥王星の話題が様々なメディアで取り上げられたので、注目度はかなり高かったと思う。それに比べて今回は、中国と日本の領土問題に関連する事件が話題をさらい、外務省の渡航情報(8月16日付)では「注意喚起」が出され、9月5日現在もこれは継続している。筆者は8月22日から9月1日まで北京に滞在し、いくつかのセッション、閉会行事、エキスカッションなどに参加したので、簡単に概要を報告する。

2. 総会ハイライト

第28回総会は、2008年に北京オリンピックが開催された地区にある国際会議場(China National Convention Center: CNCC)で行われた。80の国と地域、約3000人の参加者、口頭、ポスターを合わせた発表は3000本近い。

今回の総会において、北朝鮮、エジプト、カザフスタンの3カ国が新しく加盟した。8 Symposia、7 Joint Discussions、及び18 Special Sessions において活発な議論が交わされた。またIAUの会長として、元国立天文台の海部宣男さんが選出された(図1)。新会長は、就任スピーチの中で、今回の総会で強調されている教育とアウトリーチの重要性について力強く述べられた。議決事項としては、可視および赤外のフィルター仕様の標準化などがあげられていた。

3. 天文教育セッション

天文教育普及関連のセッションは、特別セッション(SpS)として、以下のふたつが開催された。

- ・ SpS11: IAU Strategic Plan and the Global Office of Astronomy for Development
 - ・ SpS14: Communicating astronomy with the public for scientists
- IAUのDivision XIIに入っているCommission 46 Astronomy Education & Development



図1 IAU 総会 閉会式で挨拶する 海部宣男 新会長

と Commission 55 Communicating Astronomy with the Public が主催である。

SpS11 は前回のブラジル大会で承認された活動計画で、三つの部門の活動が提起されていて、(i) Astronomy for Universities and Research, (ii) Astronomy for Children and Schools, (iii) Astronomy for the Public である。(ii)には和歌山大学の富田さん、(iii)にはハワイ観測所の臼田さんが、それぞれメンバーとして名前を連ねている。筆者はこのセッションに発表を申し込んだ。口頭 25 件、ポスター 25 件の発表があったが、ポスターには 1 スライド 30 秒の口頭プレゼンの時間が確保されていた(図 2)。Development に相当する発表が多く、このセッションの目的として 'Astronomy for a better world' というスローガンが掲げられているが、2010 年から 10 年間を目途に成し遂げたい課題が多数発表されていた。特に、アフリカでの実践レポートが目立った。アジアからの発表もあったが、多くは昨年の APRIM (Asian-Pacific Regional IAU Meeting) で発表されたものであった。口頭講演での質疑はそれなりにあったが、ポスターはコアタイムがはっきりせず、広い会場に人影はまばらであった。APRIMの方が濃い議論ができていたと思う。

SpS14 では、今回のタイトルに "for scientists" と付け加えられているように、大学、研究機関の実践報告の総覧を見させてもらった。Web, SNS はもちろんだが、天文学と〇〇のコラボレーションというスタイルも目立っていた。日本の天文学研究施設に広報普及のセクションが設けられるようになってずいぶん時間が経つが、世界の先進的なレベルに近づき、ある面ではリーダーとして牽引できるまでになってきた感がある。セッションの進行・運営は、非常にルーズで、発表順の突然の入れ替え、発表者不在など、エント

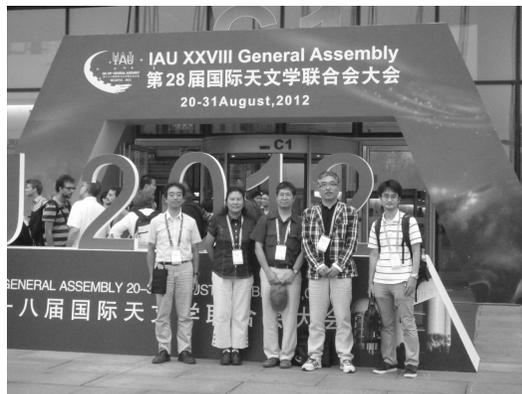


図 2 日本から参加した教育普及関連の参加者と筆者(会議場のゲートにて)

リーした参加者はかなり戸惑っているようであった。

教育普及のセッションとして、このふたつがどんな関係にあるか、どのように協調していくか、それぞれのセッションで冒頭にスピーチがあった。しかし、どうもよくわからない。今回のようなセッションテーマであると、筆者のような学校教育主体の講演の位置どりは難しい。Official education という柱は、天文教育の中で大切な柱のひとつであるから、IAU の中で位置づけをはっきりさせるべきではないかと感じた。

4. 私を揺さぶった講演

今回の総会で最も講演数が多かったのは、系外惑星関連のセッションである。天文学のすべての分野から、アプローチする人が続出している感がある。27日から5日間続いた注目のセッションである。

IAUS 293 Formation, detection, and characterization of extrasolar habitable planets

ケプラーミッションの成果の要約講演では、圧倒的な取得データを紹介し、系外惑星の統計処理結果が示された(図 3)。セッションタ

イトルからわかるように、地球型惑星の検出から一歩進んで、生命の存在が可能かどうか環境調査する段階までできているのである。一方で、惑星系形成の数値モデルについては、日本の小久保さんが招待講演で、非常に完成度の高いモデル計算結果を示した。

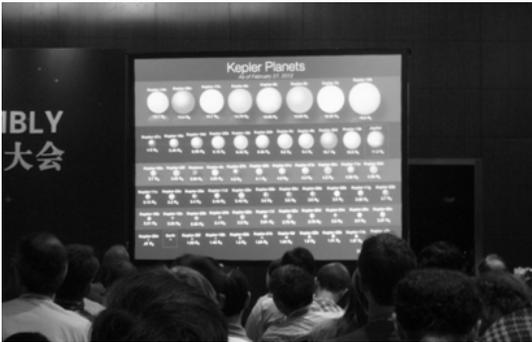


図3 ケプラーが発見した系外惑星の半径
(最下段左から2番目が地球サイズ)

天文学の目的が、宇宙における時空間認識の獲得だった時代を経て、現代的な目的として、宇宙の中で私たちの同僚を探すということが付け加えられようとしている。

5. 北京事情とエクスカーショ

今回は長い滞在なので、懇親会、エクスカーショツアーをフルオプションで申し込んだ。結果的には、金額的に見合わない、内容もいまひとつのものだった。かなり後悔しているというのが本音である。懇親会は、オリンピック競技場「鳥の巣」内のレストランを借り切って行われたが、競技場のフィールドを見渡せる構造のため細長い間取りであり、テーブル毎に黙々と飲食するだけという寂しいものだった。メインステージでは余興などもあったようだが、離れた席からは何をやっているのかわからなかった。

ツアーの一番人気は「万里の長城」(図4)であったが、土曜日は車の渋滞が激しく、現地の長城では新宿・歌舞伎町並みの混雑でへ

とへとになった。「天安門・故宮博物館」ツアーも似たようなものであった。北京の交通網を少し知っていれば、個人で出かけた方がずっと良かった。これらのツアーとは別に、セッションの合間の平日には、北京の街の散策を兼ねて、最新鋭のプラネタリウムが導入されている「北京天文館」、都会の中にある天文台遺跡「古現象台」(図5)を訪れた。



図4 万里の長城



図5 古現象台

北京の朝夕は、自転車の大群で道路が覆われるという先入観を持っていたが、少数の電動バイクと自動車ばかりであった。そのせいかスモッグがひどく、朝から空は靄につつまれ、夕方昇ってきた月は輝きを失って赤く染まり、大気汚染はかなり深刻という感じがした。タクシー料金は日本の1/5程度だが、会

議場へ通うのも、観光地へ行くのも、積極的に地下鉄を利用した。オリンピック以降に整備された 10 本以上の地下鉄路線は統一料金 2 元(約 30 円)という安さで便利である。乗換でかなり歩く駅もあるが、表示はわかりやすく迷うことはない。地下鉄内では、老若男女問わずスマートフォンを操作している情景にびっくりした。携帯の電波はどこでもきちんと入っていた。フェイスブック、ツイッター、ユーチューブがブロックされているお国柄ではあるけれど、それなりの楽しみ方はあるようだ。

領土問題について、北京市内で目立った動き、変わった雰囲気は感じられなかった。ただ、テレビでは頻繁にニュースで扱われていた。たぶん、日本のマスコミもそうだったのだろう。多くの市民にとって、国威高揚のための領土問題など関心は薄い。特定な場面を切り取り、対立を強調することによって世論を操作することは、どこの国でも行われているようだ。

中国と言えば中華料理である(図 6)。ファーストフードから高級店まで、値段も味もずいぶん違う店が存在する。ひたすら食べまくったので、帰国時には体型に変化があらわれたほどである。ただし、ビールは燕京ビールと言う北京の地ビールばかりで、苦味のないあっさりした味は、あまり好みではなかった。

6. おわりに

北京大学に通う 3 年生の S 君と懇親会で仲良くなった。中国では高校で天文学を学ぶことはなく、物理、化学、生物だけらしい。0.1% くらいは学習する機会があるとも聞いた。日本では 5% くらいかなと言うと、「それは素晴らしいことです」と驚いていた。大学で天文学を専攻する彼は、高校時代から星が好きで、



図 6 円卓を囲んで中華三昧

その魅力は「美しさ、神秘さ」だと言う。星の写真を撮ることも好きだと言っていた。物理学の対象物として天文を選んだのではなく、彼の中に宇宙に対する純粋な憧れがあることを感じた。

ヨーロッパなどのほとんどの国では、地学・天文学が高校の教育課程に存在しない。日本は恵まれているのか、不十分な教育で宙ぶらりんなのか、ちょっと考えた。せっかくの教育のチャンスを生かすには、新しい発想が必要ではないか。たぶんそれは、競争より共同で何かをすることだろう。“Astronomy for a better world”とは、より多くの若い人たちが天文学を通じて宇宙の真理・神秘に触れ、仲良く地球に存在し続けることなのだろう。

鈴木 文二